いわての
伝統工芸
新しいカタチ

「伝統」と「革新」、一見相反するようですが、両者はつながっています。そのときどきの新しい提案、新しいかたちを加味し、現在の伝統あるものをつくりあげています。

常に挑戦！
秀衡塗工房　丸三漆器

「だまっていては必ずすたれる。何か新しいものを生み出さなくては」と語るのは、代表の青柳一郎さん。実用化には至らなかったが、秀衡塗の技術を生かした和のイメージのエアコンや、秀衡塗のアイデアを生かした新しいタイプのグラスをつくっています。挑戦し続けることが青柳さんの信条です。

1つずつていねいに漆で仕上げる

新企画のワイングラス。白ワインを入れると「箱根駅伝」の文字が見えてくる

「和モダン」のインテリア小物を提案
岩谷堂箪笥生産協同組合

岩谷堂箪笥は主にケヤキ、キリを使い、漆で塗装し、美術品のような彫金や南部鉄器の金具をつけた高級品です。その岩谷堂箪笥のよさを生かして、手軽に購入できるものという発想でつくりあげたのが、「岩谷堂くらしな」シリーズです。家具デザイナーと協働し、時計や花びん、なべしきなど、小物雑貨、小物家具を提案、提供しています。

「くらしな」開発会議

ペン立て

時計

花びん

南部鉄器をプロモーションする
及源鋳造

「製造とともに大事なのはブランディング」と話すのは及源鋳造ブランディングチームの橋本太郎さんと関根涼さん。

同社は1970年以降、プロのデザイナーの力を借りて新商品を開発し、販路を海外に求めてきました。今はさらに、国内・海外で関係者に取材を重ね、及源鋳造のあるべき姿を追究し、及源鋳造にふさわしい製品を世に出そうとしています。そこでたどり着いた一つの方針が同社の主力製品であったなべ・かまの現代への再現。より使いやすいなべ・かまを、製作意図、製作工程、使い方などの提案を含めて販売しています。

人気商品の1つ「タミさんパン焼き器」

工場2階のショップ

橋本太郎さん（右）と関根涼さん（左）

発行：岩手県商工労働観光部産業経済交流課
〒020－8570　岩手県盛岡市内丸10－1

いわての伝統工芸
匠の技

IWATE

伝えたい
私たちのまちの
伝統工芸

photography by OIGEN

岩手県の｜伝統工芸産業｜

岩手県は伝統工芸品づくりが盛んですが、厳しい
環境下にもあります。現状や対応策を見てみましょう。

■伝統工芸とは

一般的に、長年にわたり受け継がれている技術や技が用いられた工芸品を指しますが、その中でも次の５つの要件を全て満たしたものを経済産業大臣が「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づいて「伝統的工芸品」として指定しています。

1．主として日常生活で使用する工芸品であること。
2．製造工程のうち、製品の持ち味に大きな影響を与える部分は、手作業が中心であること。
3．100 年以上の歴史を有し、今日まで継続している伝統的な技術・技法により製造されるものであること。
4．主たる原材料が原則として 100 年以上継続的に使用されていること。
5．一定の地域で当該工芸品を製造する事業者がある程度の規模を保ち、地域産業として成立していること。

岩手県では、「南部鉄器」「岩谷堂箪笥」「浄法寺塗」「秀衡塗」の４つが指定されています。

経済産業大臣指定
伝統的工芸品
承認番号 28-294

南部鉄器　盛岡市、奥州市

「質実剛健」「丈夫で長持ち」が特徴の鋳物です。炭火の中に鉄瓶を入れて焼く「金気止め」は、さびを防ぐ南部鉄器特有の技術です。1975（昭和 50）年２月に指定されました。

岩谷堂箪笥　盛岡市、奥州市

主にキリ、ケヤキ、クリを材料とした和箪笥で、美しい木目、重厚な漆塗り、華麗で豪快な手彫りの金具が特徴です。1982（昭和 57）年３月に指定されました。

浄法寺塗　二戸市、八幡平市、他

地元産の「浄法寺漆」を用い、原料から製品まで地域でつくる、全国でもまれな漆器です。実用性重視のシンプルなデザインが特徴です。1985（昭和 60）年５月に指定されました。

秀衡塗　一関市、平泉町、他

トチ、ケヤキなどの木地を生漆で固め、数回の塗をへて、雲形の文様と菱形を組み合わせた「有職菱文様」を描いて完成させます。1985（昭和 60）年５月に指定されました。

安比塗（八幡平市）　南部古代型染・紫根染（盛岡市）　ホームスパン（盛岡市、花巻市）　南部裂織（盛岡市、他）　大野木工（洋野町）
小久慈焼（久慈市）　台焼（花巻市）　竹細工（一戸町）　あけびづる細工（西和賀町）　こけし（盛岡市、花巻市、西和賀町）
花巻人形（花巻市）　久慈琥珀（久慈市）　マリンローズ（野田村）　東山和紙（一関市）　成島和紙（花巻市）　南部箒（九戸村）
紫雲石硯（大船渡市、一関市）　大漁旗（大船渡市）　太鼓（大船渡市、他）　木工品（遠野市、他）

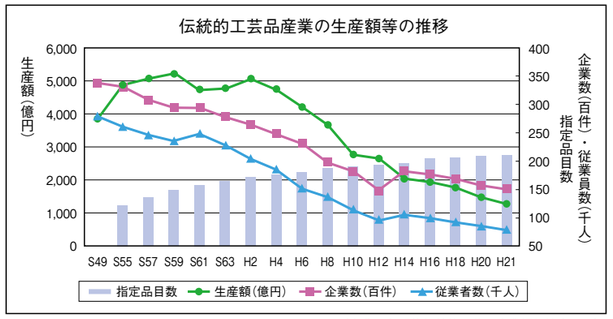
■伝統工芸産業の現状

経済産業大臣指定の伝統的工芸品について見てみると、生産額は約 5,237 億円だった 1984（昭和 59）年をピークに下降を続け、2009（平成 21）年には約 1,281 億円と約４分の１になっています。つくっている企業や従業員の数も約１万 5,100 社／約７万 9,000 人と減少に歯止めがかかっていません。

経済産業省では、伝統的工芸品産業が直面する課題として、

1．需要の低迷……人口の減少、ライフスタイルの変化、大量生産の安価な生活用品の普及、輸入品の増加などにより、伝統的工芸品を使う人が減った。
2．量産化ができない……手間と時間をかけた丁寧な仕上げを必要とし、原材料・技術も特別なものが多い。さらに生産体制も小規模なため大量生産ができない。
3．人材・後継者の不足……つくっている人の数が 1980（昭和 55）年の約 26 万 1,000 人から 2009（平成 21）年約７万 9,000 人と約３分の１に減り、しかもそのうち約 64％が 50 歳以上となっている。
4．生産基盤（原材料や生産用具など）の減衰……原材料が主に自然素材で再生産には制約があり、使用できるようになるまでに長い時間が必要。さらに生産用具、用具の材料の採取、用具の製作・修理などを担う人材も廃業を余儀なくされている。
5．生活者のライフスタイル・価値観の変化と情報不足……生活で利便性・機能性が重視され、伝統的工芸品が使われる機会が減少。さらに伝統的工芸品の「本物のよさ」や、日常生活における使用・活用・メンテナンス方法などの情報・理解が不足している。

の５つをあげています。



（出典：（一財）伝統的工芸品産業振興協会調べ）

■伝統工芸を取り巻く環境の変化

こうした伝統工芸産業の現状に対して、国では伝統的工芸品の産地の組合などが行う商品開発・展示会や後継者育成の費用を補助したり、（一財）伝統的工芸品産業振興協会を通して人材確保、技術・技法等の継承、産地指導、普及促進、需要開拓などの事業を行っています。国が進める「クール・ジャパン戦略」でも「伝統的工芸品を含む地域産品」は重要な柱となりました。

岩手県でも様々な取り組みを進めています。例えば、岩手県工業技術センターでは、フィンランドの見本市の視察や現地デザイナーのアドバイスにより、外国の人々のニーズに沿った家具や漆器・鉄器などの開発を促し、伝統工芸品の欧州への輸出支援を行っています。

海外で人気のカラー急須

職人からのメッセージ

第一線の伝統工芸産業で活躍する職人たちは、
どのようなことをし、どのような考えを持っているのでしょうか。

南部鉄器職人 髙橋さんの１日

4・	睡眠
5・	
6・	起床
7・	散歩
8・	食事
9・	仕事
10・	
11・	
12・	昼食・昼寝
13・	
14・	仕事（途中畑の世話）
15・	
16・	
17・	
18・	
19・	
20・	夕食
21・	プライベート
22・	
23・	
24・	
1・	睡眠
2・	
3・	

Q 職人になろうと思ったきっかけは？

サラリーマンをやめて仕事を探しているときに、新聞で「南部鉄器の後継者が不足している」という記事を見ました。これはいいと思い、軽い気持ちで職人の道に入りましたが、２年で挫折。ほかの仕事をしているときに南部鉄器の先輩に偶然出会い、「お前、今のままでいいのか」と言われました。悩んだ末、せっかくの南部鉄器の知識と技術を生かしたいと思い、再び、南部鉄器づくりの仕事に戻りました。

Q 南部鉄器の魅力は？

南部鉄器の製作は、デザイン、鋳型づくり、文様押し、鉄の鋳込み、着色まで、つるを除き全部一人でできます。また、岩手には南部鉄器に必要な鉄、砂、粘土、炭、漆がそろっています。つまり、やろうと思えば、材料の準備から、思い描いた製品の完成まで全部一人でできるんです。そこに魅力を感じています。また、そうやってこの岩手でつくられたものがヨーロッパや中国など海外でも使われています。そこに誇りを感じています。

Q 岩手の子どもたちに、どんなことを伝えたいですか？

岩手には伝統工芸がたくさんあります。そういう文化があり、自分が関われることを知ってほしい。自分と同じように、職人を目指す人が出てきてほしいですね。

南部鉄器
鉄瓶工房髙橋
髙橋大益さん

昭和 46 年、岩手県花巻市生まれ。盛岡の工房に 14 年間勤めた後独立。現在、雫石町に工房を構え、「キノコで一休み」など個性的な鉄瓶を製作中。

髙橋さんがつくった鋳型

「キノコで一休み」

岩谷堂箪笥職人 鈴木さんの１日

4・	睡眠
5・	
6・	起床
7・	食事など
8・	出社
9・	仕事（途中 15 分休憩）
10・	
11・	
12・	食事
13・	仕事
14・	
15・	休憩
16・	仕事
17・	
18・	帰宅
19・	準備・夕食
20・	プライベート
21・	
22・	
23・	
24・	睡眠
1・	
2・	
3・	

Q 仕事の内容は？

木地づくりをやっています。部材はほかの人が用意してくれるのですが、それを目的のたんすに合わせて切ったり、みぞを掘って組み合わせたり、たんすの形に組み上げるまでをやっています。

Q 岩谷堂箪笥づくりの魅力は？

なんといっても伝統があるので、その伝統に従事できることです。また、同じようなたんすをつくっているように見えますが、木は生きています。堅かったり、柔らかかったりいろいろ違うので、同じようにはできません。そこが難しいですが、やりがいのあるところです。

Q 後輩にどう接していますか？

自分の今の技術は師匠の指導のおかげです。後輩たちには、師匠に教わった基本的なことを指導するようにしています。そのうえで、どうやったらいいものを、早く、正確にできるか、工夫することを求めています。

Q 子どもたちに望むことは？

勉強や部活も大事ですが、かつて私たちがやったように家業の手伝いもしてほしいと思っています。家業を手伝って仕事を体験することは、いずれ自分が生きる上で力になります。

岩谷堂箪笥
藤里木工所
鈴木高子さん

昭和 40 年、岩手県奥州市生まれ。平成５年、藤里木工所に入社。岩谷堂箪笥の木地加工部門に従事。平成 22 年、伝統工芸士取得。

くぎを使わず、のみで彫って組み上げる

木地の完成

秀衡塗 絵付けだけでも奥深い

丸三漆器
菊地優太さん

高校を卒業して以来、一貫して漆を塗ったり、金箔をはったりするなど絵付け中心の仕事をしています。８年が経過しましたが、まだ、絵付け工程の半分くらいしか習得できていないと思います。絵付けをマスターするべく、日々取り組んでいきます。

漆を塗る菊地さん

木工 日常使えるものをつくり続けたい

おおのキャンパス
瀧音嘉幸さん

15 年前に東京からＵターンして木工のクラフトマンを目指してやっています。手づくりの木工の食器が評判を呼び、各地の保育園で使われるようになり、生産が追いつかないくらいです。

「使っていますよ」というお客様の声がうれしいです。ますます腕をみがいて、町をもっと豊かにしていきたいです。

人気の保育給食器セット

ろくろを使う瀧音さん

安比塗 漆に魅せられました

安比塗漆器工房
工藤理紗さん

大学を卒業して、安代漆工技術研究センターに漆の勉強にきました。ここでは２年間勉強するのですが、漆は気分屋で湿度、温度はもちろん、水分の含有量、木地の特性などによって工程も仕上がりもとても違います。しかし、私はこの漆に魅せられ、もう 14 年も塗師を続けています。今後もずっと続けると思います。

漆器づくりを学ぶ研修生
（安代漆工技術研究センター）

八幡平市でつくられる安比塗

これからの岩手の伝統工芸

伝統工芸の担い手が、岩手の伝統工芸のこれからを語ります。

漆器

秀衡塗（ひでひらぬり）翁知屋（おおちや）
佐々木優弥（ささきゆうや）さん

大学では経済学部でした。26歳のとき父の病気で家業を継ぎ、秀衡塗の世界に足を踏み入れて以来、古くからの翁知屋のお客様にはずいぶん助けていただきました。

だからこそ、秀衡塗を広めるにしても、むやみに宣伝すればいいわけではなく、末永く愛用してくださるお客様の心をしっかりととらえる必要があると思っています。そのためにも「今後来そうだな」というニーズを予測して新しいものに挑戦しています。その新商品がすぐに売れなくてもいいのです。その中に詰め込んだ技術やノウハウが後から活き、ブランドの顔になっていきますから。

ニーズを予測して新しいものに挑戦

こけし型の線香入れ。伝統的な器以外にも様々な商品を開発しています。

トチでつくった「ぐいのみ」は、2016年の伊勢志摩（いせしま）サミットでG7各国首脳への贈答品として使われました。

秀衡塗のルーツはお椀（わん）にあり、現存する最古のものは16世紀のものです。

ホームスパン

ホームスパン中村工房
中村和正（なかむらかずまさ）さん

手で触って選んだ羊毛が、手染め・手紡ぎ・手織りと作業で手が入るたびに違った表情を見せます。糸をつくるところからでき、一回一回が違った仕事になるのがホームスパンのおもしろいところです。

一方で、触ってもらわないとよさを伝えにくい。ネット販売が難しいということもあります。また、一つ一つが世界に一つだけの作品ですから「あれと同じものを」というオーダーはとても困ります。

なるべくたくさんの人に触れてもらうために、羊毛をいかに大事にして、お客様が欲しいと思うものをつくるかが課題です。

一つ一つが世界に一つだけの作品

4代目和正さん（左）と先代で父親の博行（ひろゆき）さん（右）

現在ではマフラーやストールが主力商品です。

バッグや帽子などの新商品を開発し、商品の幅を少しずつ増やしています。

なるべく羊毛そのものの色・風合いを活かせるように、ナチュラルカラーの商品が中心になっています。

伝統工芸品を生かす

暮らしに役立つものであることが、伝統工芸品に求められることです。

暮らしに根づいてきた東北の伝統工芸品

書籍、文房具などとともに伝統工芸品を販売している東北スタンダード株式会社代表の金入健雄さんは、東北の伝統工芸品にほれ込んでいる方です。その魅力を次のように語ります。

金入さん：「東北地方は日本の東の北だけあって、昔ながらの生活、昔ながらの製品が残っています。そもそも東北の工芸品は、殿様や貴族に献上するためでなく、自分たちが使うためにつくったものがほとんどです。自分たちが使いやすい、そして暮らしを便利にするものを追究した結果、現在まで残っているものが伝統工芸品です。300 年も 400 年も同じものをつくり続け、売っているのはなかなかないことですが、そこが面白く、関わっています。」

東北スタンダード株式会社
代表　金入健雄さん

■生活に合う道具であることが大事

2011（平成 23）年の東日本大震災の直後は、東北の復興のためという目的で、東北の伝統工芸品がよく売れました。いま、その流れは変わり、いいもの、暮らしに合うものが求められています。

金入さん：「昨今アジアで南部鉄瓶がよく売れていますが、アジアはお茶の文化があり、お湯が冷めにくく、お茶の味をよくする南部鉄瓶が気に入られるのは理にかなっています。このように暮らしに役立つ製品でなければ意味がありません。さらに最近は、商品がどのようなところで、どのような考えのもとに、どのようにつくられているかが求められています。そのような商品の価値を私は伝えていきたいと思っています。」

職人さんとのコラボレーションでつくった
南部鉄器の「komorebi」

■伝統を守り、そして変革をめざす

金入さんはものづくりにも挑戦しています。

たとえば、南部鉄器の質感と重さを生かしたフラワーポット。机の上で背の高い花を活けることができ、鉄の質感と温かみがあります。机の上に木漏れ日をつくろうとの思いから、「komorebi」とネーミングされています。

金入さん：「ほかにもいくつか新製品をつくっていますが、一緒にチームを組んでいる職人さんは長い伝統をつないできた方たちです。職人さんは伝統を守りつつ、新しい技や製品に挑戦しています。私の役目はそれを伝える場所づくりをやっていくことだと思っています。」

店内には暮らしに役立つ伝統工芸品がならんでいる
（KANEIRI STANDARD STORE　盛岡市）

日光東照宮の修復に使われている浄法寺漆

日本を代表する建造物で「世界遺産」に登録されている『日光東照宮』。江戸時代初期に当時最高の建築・美術・工芸技術をもって造られ、漆塗・彩色などの外装にも様々な技術が用いられています。その素晴らしい建造物を後世に残すために、江戸時代には 20 年に 1 度、明治以降は 50 年に 1 度の周期で修理がなされてきました。そして、現在は「平成の大修理」と言われる大規模な修復作業が行われています。2007（平成 19）年に始まり、2024（平成 36）年に終了する予定です。この東照宮の平成の大修理に浄法寺漆が使われています。

東照宮の建物の表面には、木材に強度を持たせ、美しさを保つために漆が塗られています。しかし、長い年月風雨や日光にさらされることで、漆がひび割れし、はがれたりします。そのため、漆を塗り直し、表面を強固にしていくのです。

日光東照宮（栃木県日光市）

布着せ

中塗り

■重要文化財建造物の修復には国産漆を使う

従来、コストや量の確保の問題で建造物の修復には中国産の漆が使われていました。ところが、修復後数年で漆がはげて木地が腐るなどの不具合が生じました。国産漆で修復する方が耐久性が増すことがわかり、文化庁は 2015（平成 27）年に、国宝や重要文化財の修復には国産漆を使うようにとの通達を出しました。当面は上塗り、中塗りに国産漆を使いますが、2018（平成 30）年度までには下地を含めた全工程に国産漆を使うことを目指すとしています。

◎このような修復にも浄法寺漆が使われています

●中尊寺金色堂

（1964 年に修復）

平泉の文化遺産の中でも金色堂は、平安時代の漆工芸の最高傑作と言われ、それを修復し、金箔をはり直すために、約 100kg の浄法寺漆が使われました。

金色堂

●金閣寺

（1986 ～ 1987 年に修復）

このときの修復には従来よりも厚い金箔が使われ、そのために純度の高い漆が必要でした。それに応えたのが浄法寺漆で、約 1.5 トンの漆が使われました。

修復された金閣寺

世界に伝えたい、岩手の伝統工芸品

南部鉄器をはじめとする岩手の伝統工芸品のよさを
世界に伝える試みが官民一体となって行われています。

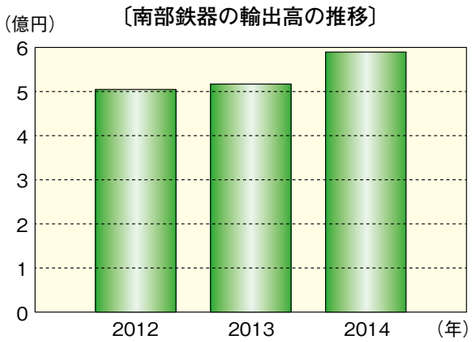
■伝統工芸品の輸出

海外貿易は昭和に始まっており、南部鉄器は昭和 30 年代半ばには輸出されていました。しかし、輸出が増えだしたのは平成に入ってからです。

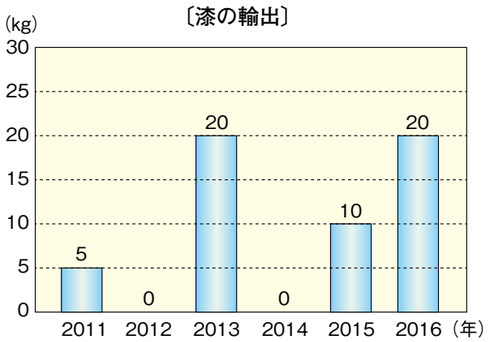
盛岡の岩鋳株式会社は、今から約 25 年前、フランスの紅茶メーカーの要望に応じてカラフルな急須をつくったことがきっかけで輸出が伸びました。今ではヨーロッパ、アメリカ、アジアに輸出され、同社の売り上げの約半分を輸出が占めるようになっています。

長い伝統に裏打ちされた南部鉄器のよさは今や海外に浸透し、カラフルな急須以外も人気で、他社の輸出も年々増える傾向にあります。

また岩手県は浄法寺塗や秀衡塗など漆器産業も盛んです。漆の日本一の産地である二戸市浄法寺の漆とそれを使った製品の輸出も 2011（平成 23）年から始まり、販路が拡大しつつあります。



（出典：「2014 年　岩手の貿易」ジェトロ盛岡）



（出典：株式会社浄法寺漆産業）

■海外に向けた商品の開発

海外の人々にとって使いやすい、そして愛される商品の開発は伝統工芸の大きな課題です。

南部鉄器協同組合は海外で販売する新商品の開発を目的に、2006（平成 18）年、中小企業庁が実施する「JAPAN ブランド育成支援事業」に参加。フィンランドのデザイナーと南部鉄器職人が協力して製品をつくり、デザインも品質も気に入られ、ヨーロッパを中心に堅実な販売が続いています。

岩鋳株式会社では海外の主な国に販売代理店があり、代理店にお客様の要望を聞いてもらい、それに基づいた商品の開発を積極的に行っています。国内の専任デザイナーだけでなく、海外のデザイナーにデザインしてもらうこともあります。

奥州市水沢区の及源鋳造株式会社では新製品開発と販売促進を行うチームを立ち上げ、工業デザイナー、プロの料理人らの協力も得つつ商品をつくり、そのコンセプトや使い方も含めた情報発信を行っています。

海外の市場に出向いたり、海外のお客様に日本に来てもらったりして、生の声を聞くなど、様々な方法でニーズを探りながら、伝統を守りつつ、新商品の開発を行っています。

海外での販売に向けて製作した塗装なしの鉄製ネイキッドパン。IH にも対応（及源鋳造）

■海外の展示会・ギフトショーに出展

昭和 30 年代、南部鉄器を初めてヨーロッパで販売するにあたっては、商品を実際に持参してひと月もふた月も各地を営業してまわったそうです。そういう努力が今の販路を築いています。

現在、輸出に向けての取り組みで多いのは、海外で開催される見本市や展示会に出展する、あるいは独自に商談会を開催する方法です。

中国でも今や南部鉄器は大人気で、生産が追いつかないほどですが、そのきっかけとなったのは 2010（平成 22）年の上海万博でした。この上海万博に岩手県とプーアル茶で有名な雲南省プーアル市、上海の茶館である上海大可堂茶業有限公司が共同展示ブースを設置し、南部鉄瓶も展示されました。そこでプーアル茶がいっそうおいしくなると高い評価を得たのでした。

上海万博の南部鉄器コーナー

世界最大の国際消費財見本市と言われる「アンビエンテ（ドイツ・フランクフルト）」には日本の伝統工芸品がいくつか出展されますが、ここでも南部鉄器は毎年のように展示されています。

アンビエンテで展示されている南部鉄器の急須など

浄法寺漆のセミナー（にのへシティフェア in ニューヨーク）

二戸市では、特産品の販路拡大と市のブランドイメージの向上を図るために、2013（平成 25）年から米国・ニューヨーク市において「にのへシティフェア in ニューヨーク」を開催しました。ここで浄法寺塗が展示され、漆や漆器の製造について学んでもらったり、現地のレストランで実際に浄法寺塗で食事をしてもらったりしました。

浄法寺塗で食事の体験（にのへシティフェア in ニューヨーク）

盛岡商工会議所が「南部鉄器フォー・ユーロ・ブランディング事業」において開発した南部鉄器製品を、パリの三越エトワールで開かれた日本商工会議所等が主催する商談会へ出展しました。

JAPAN ブランド Exhibition in Paris 2010
南部鉄器が出展され、多くのバイヤーの目にとまりました